資料５

総括報告書事実記載の内容と提示方法

第１章第５節　調査概要

過去の調査をまとめ表で掲載し，概要説明。各調査地点の入った遺跡全体図(折り込みページないし別添)掲載。なお，各調査区の遺構配置図は第２章に掲載。

第２章　調査区・遺構

以下のように調査年次ごとに掲載予定。各調査区の遺構配置図及びグリッド設定図を先頭にトレンチ・遺構平面図を掲載する。特に東傾斜面のように遺構全体を検出しているものは通常の報告書と同じ体裁で挿図を作成中。遺構プラン等について表にまとめて掲載する。平面に図化されていない土層中の硬化面やピット等，遺構の可能性があることを記載し、新たに番号を付す。また，原図を整理する中で分かった未掲載遺構について新たに遺構番号を付し，既報告遺構とは別項を設けて掲載する(主に土坑)。

第１節　第１次・第３次　北貝塚　←年次的に前後するがほぼ同一調査区である第３次はこちらに記載。例：(１)竪穴建物跡，(２)土坑，(３)特殊遺構，(４)未掲載遺構 etc.
第２節　第２次　南貝塚
第３節　第４次・第５次　北貝塚
第４節　第６次・第７次・第８次　東傾斜面
第５節　第９次　南貝塚・東傾斜面
第６節　第10次　南貝塚・東傾斜面
第７節　第11次・第12次・第13次～　外縁部調査

第３章第２節　土器

（１）縄文土器の概要

早・前期　撚糸文期では東傾斜面調査区で井草２式が検出されており、現在のところ加曽利貝塚最古の土器である。条痕文期では東傾斜面に炉穴が確認され最古の遺構である。前期では黒浜式・諸磯式が東傾斜面で小量出土しており、黒浜式の住居跡を検出している。

中期前半　この時期の土器は殆ど無い。中葉では阿玉台式が北貝塚を中心に遺構に伴い出土が報告されている他、４次調査Ｉトレンチでは貝層の形成が確認できる。また２次調査Ｖトレンチの北端でも貝層に伴って阿玉台式が出土しているが、この貝層は北貝塚に含めて考えるべきだろう。

中期後半　加曽利ＥＩ式は北貝塚中心に出土し、加曽利ＥⅡ式は南貝塚・東傾斜面にも分布する。加曽利ＥⅢ式は南貝塚・東傾斜面中心の分布である。加曽利ＥⅣ式は北貝塚第４調査区５グリッドにまとまりがあり、２次調査の各トレンチで少量の出土がある。

後期初頭　称名寺式期は２次調査の各トレンチで少量出土し、集中する地点もある。またこの時期では近年提唱されている加曽利ＥＶ式(称名寺式期の加曽利Ｅ系統の土器)の割合が、神奈川・埼玉などと比較すると比較的多いが、これは房総半島の平均的なあり方と言える。太平洋側に比べれば称名寺式系土器の割合が多い。Ｖトレンチ72～78グリッドに集中地点がある。

堀之内１式　南貝塚中心に出土し貝層分布の外縁に集中地点がある。南貝塚では土器出土量の一つ目のピークを形成する。

堀之内２式　出土量が減少するが、２次Ⅲトレンチ30～35・66～71グリッド（以下グリッド略）に集中する。

加曽利Ｂ１式　Ⅰトレンチ70～73・Ⅲトレンチ65～68・Ⅵトレンチ24～28に集中する。

加曽利Ｂ２式　Ⅰトレンチ70・72・Ⅲトレンチ24～26・Ⅳトレンチ23～29・Ⅵトレンチ27～29・53～57に集中する。

加曽利Ｂ３式　Ⅰトレンチ75・Ⅲトレンチ22～25・27～28・Ⅳトレンチ24と26～30・Ⅵトレンチ24～27・53～57に集中する。

曽谷式　Ⅰトレンチ72・75に集中するが、他にまとまった出土地点はない。

安行１式　Ⅰトレンチ62～64・68～70・Ⅲトレンチ28～34・Ⅵトレンチ45～49・51～56と63～66に集中する。

安行２式・安行3a式　Ⅲトレンチ32～34、Ⅳトレンチ62に集中する。

安行3b式・姥山式　Ⅰトレンチ61～64・Ⅳトレンチ62～69に集中する。更に２次調査で平面的な調査を行った第11区の主体はこの時期である。

（２）縄文土器の特徴

加曽利貝塚では、千葉県内の遺跡としては、異系統土器の存在が目立たない。中期中葉に勝坂式土器は一定量認められるものの、市川・松戸や木更津・君津と比べれば微々たるものである。加曽利ＥⅡ式期では木更津・君津地域に曽利系や連弧文系、九十九里地域には大木式系が一定量見いだせるのが普通だが、極めて

少数である。後期中葉～晩期にかけては、東北系の瘤付系や大洞系が少量見いだせるが、他遺跡と比較しても少ない印象である。晩期中葉で山梨県を中心に分布する未命名型式と思われる破片 1 点があるが、これについては他遺跡での検討が行われていないので評価のしようがない。

逆に在地土器の中に、他遺跡では見られないような変容や混交のあるもの、粗雑な印象を与えるものがとても多い遺跡であるという印象が強くあり、加曽利貝塚の特徴として報告に際して留意するべき点である。

（3）土器底部網代痕

ことさら取り上げるべきものではないが、一部抽出してあったので、特殊な編組法がないか確認するために観察を行った。通常遺存しないものが痕跡としてのこることは展示の素材となると考え、各種編組技法の代表例を実測し、模型を製作している。素材を色分けした模式図と実物のステレオ写真を掲載したい。

（4）赤彩土器

実体顕微鏡で塗彩の有無を確認し、有りについて一覧をつくり、塗彩により文様を描く資料を図化した。大半は加曽利 E 式の鉢や有効鍔付土器で、塗彩による文様が判明する資料が多い。顔料がよく保存されたものは，貝層出土が多く，大規模貝層をもつ当遺跡の優れた点の一つに挙げることができる。

肉眼観察で水銀朱とみられるものは小片 4 点で、1 点は外面にベンガラ，内面に水銀朱が塗布される。なお、郷土博物館の企画展『漆』図録掲載の赤色顔料の分析データ，考察を報告書に反映する。

第３章　第３節～第６節

（1）土器以外の出土遺物の概要と記載方針

土製品 1369 点、石器・石製品 2427 点、骨角歯牙製品 351 点、貝製品 693 点の合計 4840 点がある。表のように、中期に多いもの、後期に多いもの、一貫しているものがある。

（2）土製品

土器片錘　950 点出土。切込みの有無に疑いがあるものをクリーニングし、顕微鏡で観察して加工が認められないものは排除した。下総台地上の中期中葉の集落からは例外なく出土し，東京湾沿岸の大型貝塚では数千点の例がある。調査された面積の割合からすれば、かなり多いといえる。カキ類（おそらくマガキ）が付着したものが 1 点みられる。一端海底にあったものが持ち込まれたことを示す。大半は漁具とみられ、魚を絡めたまま集落に持ち帰るタイプの小形の網が日常的に使われていたことを想定できる（西野発表）。

土器片円板　顕微鏡観察により研磨または穿孔の痕跡が認められるもの 76 点と、加工痕は不明瞭だが形状から加工された可能性が高いもの 168 点、計 244 点を取り上げ、前者 76 を図化、残りは表と写真に掲載とした。南貝塚が 64%、後期中葉～後葉が大半である。北貝塚と東傾斜面から阿玉台式前半期から加曽利 EEⅢ式前半までのものも比較的多い。EⅣ式から称名寺式は見当たらず、堀之内式もごくわずかである。

近世までの各時代に同様のものが存在し、用途は、土器の補修、研磨具、ハンドピース、尻ふきなどあって定まらず、ここでもばらつきが大きく単独の用途は考えにくい。大規模貝層形成が中断する加曽利Ｅ式後半から堀之内式までは少なく、居住は継続しても、途切れるものがあることを示した。

土製耳飾・土偶・土版　土偶 90 点、耳飾 53 点、土版 10 点、がある。土偶は、後期初頭と推定される円錐形の土偶 1 点、後期前葉に類例がある「やじろべえ形」の土偶（北区東矢戸遺跡）の腕が 1 点ある。後期中葉の山形土偶は 52 点あり、磨消縄文主体（福田系列）、沈線文主体（椎塚系列）、北関東系の列点文主体（金洗沢系列）がみられる。後期後葉～晩期前半のみみずく土偶は 44 点あり、中空土偶のうち 1 点は東北からの搬入品とみられる。

耳飾は、前期のけつ状耳飾 2 点、後晩期の耳栓 3・薄川 13 点・滑車形 35 点がある。

土版は、磨消縄文主体のもの 2 点、人体意匠文 2 点などがみられる。

その他の土製品　焼成粘土塊、性格の不明の球状・環状・棒状の製品、土錘がある。環状製品は貝輪を模したもので 6 点ある。土錘は、紡錘形に成形し紐掛け溝をつけて焼成した有溝土錘が 2 点出土。1 点は溝の中に縄目がついている。土器片を有溝土錘のように加工した稀なものが 1 点あり、土器片錘と区別した。

（3）　石器・石製品

転用や刃部の再生による変形・小型化が顕著にみられるのは当県の特徴だが、どのような変化をたどり、転用されるのかを可視化した報告はおそらくない。これを実施することで、石材利用の実態と、長期にわたる居住を維持するための工夫の一端を示したい。ただし、転用前／後のどちらかに便宜的に入れた状態の点数である。報告時には、転用前の器種に含めて掲載し、転用後については点数の集計等で補うこととしたい。このほか、被熱以外の加工／使用の認められない礫が 2855 個・161kg、軽石類が 256 個・3 kg ある。

石鏃　72 点出土。当地域の中期中葉の例からみて少なすぎる。回収率が低い可能性が高く、時期的な傾向

土器以外の出土点数

網掛けは相対的に多い地区

種別1	種別2	区分	合計	北貝塚 中期中葉主 後期有	東傾斜面 中期中葉主 後葉有	南貝塚 後期主 晩期有	その他	傾向	傾向説明
石器	磨石類	生産	622	247	128	241	6	□	一貫
石器	石皿・台石	生産	312	127	56	113	16	□	一貫
石器	石鏃	生産	72	19	30	14	9	□	(本来中期多？)
石器	打製石斧	生産	287	148	63	71	5	▽	中期多
土製品	土器片錘	生産	950	671	205	46	28	▽	中期多
貝製品	貝刃	生産	515	421		94		▽	中期多
骨角器	釣針	生産	7	4		2	1		
骨角器	銛・ヤス類	生産	43	10		31	2	▲	後期多
骨角器	骨・角鏃	生産	12			11	1	▲	後期多
石器	剥片類	加工	706	56	213	437		□	一貫
石器	砥石	加工	122	29	20	72	1	▲	後期多
石器	磨製石斧	加工	122	66	22	31	3	▽	中期多
貝製品	ヘラ状貝製品	加工	15	9		5	1		
骨角器	ヘラ状骨角製品	加工	44	21		21	2	▲	後期多
骨角器	加工骨・角・歯牙	加工	135	46		86	3	□	一貫
骨角器	骨針・太形針	加工	4	2		2			
骨角器	牙斧	加工	9	7		2			
骨角器	牙錐	加工	1			1			
石製品	軽石製品	信仰/装身	109	40	29	35	5	□	一貫
石製品	石棒・石剣	信仰/装身	90	15	18	54	3	▲	後期多
石製品	玉	信仰/装身	19	4	5	9	1		
土製品	土製耳飾	信仰/装身	45	5	3	32	5	▲	後期多
土製品	土偶	信仰/装身	89	8	7	71	3	▲	後期多
土製品	土版	信仰/装身	11	1		10		▲	後期多
土製品	ミニチュア土器	信仰/装身	17	4	5	8			
貝製品	貝輪	信仰/装身	124	25		96	3	▲	後期多
骨角器	垂飾	信仰/装身	36	11		23	2	▲	後期多
骨角器	管状製品	信仰/装身	12	1		11		▲	後期多
骨角器	牙玉	信仰/装身	5			5		▲	後期多
骨角器	髪針	信仰/装身	20	3		14	3		
骨角器	骨角製腕飾	信仰/装身	3	2		1			
骨角器	腰飾	信仰/装身	2	1			1		
骨角器	牙鏃	信仰/装身	3	1		2			
骨角器	牙製腕飾	信仰/装身	3			1	2		
骨角器	環状製品	信仰/装身	2			2			
石器	他の石器	その他	13	2	3	8			
石製品	他の石製品	その他	9	2	1	5	1		
土製品	土器片円板	その他	244	20	58	156	10	▲	後期多
土製品	他の土製品	その他	40	11	11	14	4		
貝製品	他の貝製品	その他	39	9	3	26	1	▲	後期多
骨角器	弭	その他	8			8		▲	後期多

を読み取るのは難しい。

剥片類　分類可能なもの 706 点のうち、チャート 457 点、黒曜石 196 点で、それ以外の石材は 53 点にすぎない。北貝塚は全部で 56 点と少なすぎる。回収率が少ないだけでなく収納箱が見つかっていない疑いがある。東傾斜面はチャートが黒曜石を大きく上回る。中期後葉にチャートが多くなるのは確かだが、黒曜石が少なすぎるかもしれない。

打製石斧　287 点出土。中期に多い。小片が多く、完形に近いものはごく少ない。変形が多いのも特徴である。北貝塚は短冊形・分銅形の順に多く、東傾斜面と南貝塚では分銅形が多い。

磨石類，石皿・台石類　磨石類 622 点、石皿類 312 点出土。一貫してとても多い。石皿類は小片になるま

で使われる。調査面積からすると東傾斜面はとくに多い印象がある。磨石類は、敲打や研磨など複合的に使われるものが多く、叩石、凹石、磨石といった器種分類の集計では、時期的な変化や遺跡間の比較に絶えない。そこで、以下の成形／使用の痕跡を観察して位置・範囲を図と属性表で提示し、その組み合わせを数量化するとともに、特徴的なものを抽出したい。

凹み：石皿類に特有の回転穿孔によるくぼみ

窪：使用・作出と判断される上記以外のくぼみ

敲 a：表面の微細な破壊による白色化や，剥離を伴う敲打面

敲 b：表面に浮き出た硬い鉱物が離脱し，でこぼこな平滑面を形成する敲打面

敲 or 磨：ざらついた平滑面。敲打と磨りの区別が困難なもの、または両方行われたもの

磨 a：ざらついており，しばしば微細な破壊による白色化を伴う磨面

磨 b：平滑化が顕著でしばしば光沢をもつ磨面

砥面：線状痕の方向が揃った磨面

磨製石斧　122 点出土。定型品の変形・小形化が顕著で、完形品がほとんどないのが特徴である。北貝塚で66点と過半数を占める。磨製石斧は集落形成の初期に多いようである。

砥石　122 点出土。一貫しているが後期のほうが多い。大きな板状のもの（小さくなるまで使用）のほか、薄い板状、礫、後晩期に多い墨形、筋砥石、貝輪内磨き用などがある。また、硬質緻密な石材の磨製石斧、石棒類に仕上げ砥として使われたとみられる微細な線状痕がつくものが目立つ。

その他の石器　13 点出土。扁平礫に切込みを入れた石錘６点（南貝塚）、石錐２点など。

軽石製品　とても多い。穿孔をもついわゆる「浮子」とされるものや各種加工を施したものなどバラエティに富む。穿孔部には紐ずれが全く認められないため、漁撈具には含めないこととしたい。これとは別に、研磨面をもつ研磨具または研磨剤採取などの用途が想定されるものも多い。軽石素材の搬入経路は研究成果が知られていないが、北関東の遺跡に少なく、千葉に多い傾向、及び九十九里沿岸の中期集落に東京湾沿岸より多い傾向から、九十九里や富津以南の沿岸に打ちあがったものが流通した可能性が考えられる。

石棒類　90 点。緑泥片岩、粘板岩、流紋岩の順に多い。大型建物跡の床面一括出土資料は石棒類編年の定点となる。

玉類　垂飾も含めて19点。大珠２、勾玉１など。ヒスイ製品・剥片が13点ある。大きめの剥片（玉素材）が数点ある。県内では三輪野山貝塚以外では少ない。加飾をもつヒスイ製勾玉、大きなヒスイ製根付形大珠、鰹節形大珠は優品である。

その他の石製品　石棒状石製品４点、独鈷石１点、丸石１点などがある。

石材の利用　加曽利貝塚博物館開館当初からの研究テーマの一つであった。下総台地に存在しない各種石材が多数持ち込まれており、干貝との交換を想定し、大型貝塚＝干貝加工場説を裏付けるものとされた。しかし、多様な石材の利用は大型貝塚に限らないこと、中期の多量の黒曜石は神津島産であるなど、”海と山の交換”といいった単純な図式は成り立たないことが明らかになっている。１遺跡の分析結果から、石材交流の図を描く手法は一端破棄し、多くの集落の分析結果から、石材ごとの流通経路を検討する必要がある。

今回再度石材鑑定を実施し、新常設展では、一先ず誤りのないところとして、下表を示した。磨石類や石皿類は、関東各地の河川から。石棒類は、柱状・板状に割れる石材が産出する特定の場所から広域に流通。ヒスイと磨製石斧用の緻密な石材は新潟方面から製品の形で。黒曜石は、中期中葉に神津島産が、中期後葉以降は神津島産と信州産が両方入ってきた、といったことがいえる。

加曽利貝塚　石器石材の概要

器種	素材選択特徴	北貝塚 中期中葉主体	点数	東傾斜面 中期中～後葉主	点数	南貝塚 後期主体	点数
石鏃	硬くガラス質のもの	黒曜石・チャート主体	19	チャート主体，黒曜石・ガラス質黒色安山岩あり	29	黒曜石・チャート主体	13
磨製石斧	硬く緻密なもの	砂岩・緑色岩主体，ホルンフェルス，透閃石岩，変質ドレライト，変質閃緑斑岩	66	特定の石材に集中しない	20	緑色岩主体，透閃石岩，変質閃緑斑岩あり	27
打製石斧	ある程度の硬さをもち板状に割れやすいもの	ホルンフェルス・砂岩・安山岩主体，頁岩やや多い	148	ホルンフェルス・砂岩主体，安山岩やや多い	58	ホルンフェルス・砂岩・安山岩主体。緑泥石片岩類あり	70
石皿・台石類	平らな面を広くとれ，摩擦の大きなもの	多孔質安山岩・軟質岩類・安山岩主体	127	多孔質安山岩・安山岩主体	55	多孔質安山岩・緑泥石片岩類・安山岩主体	106
磨石類	ある程度の硬さをもつもの	砂岩・石英斑岩・安山岩主体，流紋岩あり	239	砂岩・石英斑岩・安山岩主体	126	安山岩・砂岩・石英斑岩・多孔質安山岩主体	226
砥石	硬い粒子で，粒子間の結合が弱いもの	砂岩・軟質砂岩主体	28	特定の石材に集中しない	20	砂岩・銚子砂岩・軟質砂岩主体	61
石棒・石剣		点紋緑泥片岩・粘板岩・流紋岩主体	15	点紋緑泥片岩主体	21	粘板岩・流紋岩主体	46
軽石製品	－	軽石	40	軽石	29	軽石	30

（4）骨角歯牙製品

骨角歯牙製品の特徴　全部で 351 点出土した。表のように南貝塚のほうが多く、とくに刺突具や垂飾類・髪針、加工痕をもつ角素材に顕著である。ただし、北貝塚と南貝塚で回収率が異なる可能性も考えられる。

生産用具等では刺突具55点、釣針７点があり、大形の鹿角製銛頭が２点含まれる。全体の残るものは一条の溝に紐を括り付けるタイプである。釣針は完形の大型品が１点ある。弭は８点あり、３点に紐を括った痕跡が認められた。とくに丁寧に薄く仕上げた１点は水銀朱を塗り、下面にアスファルトとみられる付着物がある。垂飾や牙玉の素材は、サル・キジ・タヌキ・ウミガメ・ツキノワグマ・サメなどバラエティに富む。ツキノワグマの指骨に刻み装飾を施し赤彩したもの、ツキノワグマ犬歯などがある。ほかに赤彩を施した腰飾に似た優品がある（助川資料）。今のところ類例を見いだせない。そのほか、鹿角や四肢骨製の一部に線状痕や研磨光沢をもつ各種ヘラ状製品が目立っている。

折断されたシカの顎　シカの下顎骨の先端を擦切り・折断したものが南貝塚で７点出土している。近年，東金市養安寺遺跡で 100 点以上出土し、大半は中期中葉の貝層出土である。顎の本体はヘラ状の道具として使われていた。顎の分厚い部分を中心に，比較的やわらかいものを激しく擦って，強い光沢を帯びている。弥生時代や大陸の類似例から，皮なめしに使われた可能性がある。角素材が多いことも含めて、中期中葉に養安寺遺跡に多いものが、後期に東京湾沿岸に拡散している可能性がある。

（5）貝製品

貝製品の特徴　貝刃 515 点、それ以外の製品が 178 点ある。ヘラ状貝製品は北貝塚９点、南貝塚５点である。製品を見つけるには詳細な観察が必要であり、中期にアリソガイ製、ハマグリ製の異なる用途の製品が盛行することが有吉北貝塚で知られている。後期前葉にはアリソガイ型のヘラ状製品の素材がハマグリに代わる。同様の製品の事例を増やすことができた。貝輪は北貝塚 25 点、南貝塚 96 点と多い。素材は北貝塚がイタボガキ18点と大半を占め、南貝塚ではベンケイガイ（45 点）とフネガイ科（アカガイ・サルボオ・サトウガイ、38 点）が大半を占める。当地の時期的な傾向に合う。ツノガイは加工の痕跡が明らかでないものも管状垂飾として持ち込まれたと考えられ、10 点出土している。１点は研磨され、２点が入れ子になっている。

オオツタノハ製貝輪　北貝塚で２点、南貝塚で５点あり、南貝塚第VIトレンチの貝層で５点一括出土した完形品は特筆される。１点は赤彩の痕跡がある。

彩色または顔料付着貝殻

未加工の貝殻に赤色顔料が付着したものが10点ある（ハマグリ・バカガイ・シオフキ・アリソガイ・サビシラトリ）。ハマグリにベンガラで文様を描くものは、おそらく類例のないものである。また、京都大学所蔵品のなかに赤彩した貝輪状の製品にＩ字または対向する三叉文に似た彫刻を施す製品がある。大正12年に上羽定幸が地主の所有品として紹介しており、「豊かな芸術心が彼らにすでに育まれていることを想察することができると思います」と書いている。90 年以上前に発見されたものですが、その後、発見された縄文時代の膨大な貝製品のなかに、類似のない珍品・逸品といえる。

貝刃　かつては、関東地方最多の出土数を誇った。「1964～1965 年の南貝塚で 143 点，1965～1968 年の北貝塚で 426 点もの貝刃が検出され，遺物台帳は，貝刃と土錘の名で埋まった」（堀越 1983）という言葉が事情を物語る。今回、保管資料を再観察し、腹縁の剥離が規則的または連続的で、人為的な剥離と認められるものを貝刃と判断した。ハマグリ製 405 点、カガミガイ製 70 点、その他 12 点、合計 487 点出土している。北貝塚で401 点、南貝塚で86 点と北貝塚が圧倒的に多い。県内の大規模発掘で多数出土した例には，市原市西広貝塚の 1170 点，緑区有吉北貝塚の 459 点があるが，調査面積からすれば当遺跡はこれらを上回る可能性が高い。これだけ多いことには、何らかの意味があるかもしれない。全点について刃部を顕微鏡観察したところ、研磨面を形成し線状痕がついたものが多数みられる。多くは縦方向であり、横方向も存在する。

（6）その他の製品

塊状灰　大膳野南貝塚の発掘（平成23年に調査終了）で，貝殻を焼いた灰（貝灰）が固まった「漆喰」様の物質が住居跡の炉の周囲や床全体に貼られた状態で発見された。

加曽利貝塚の保管資料のなかで、石器・石製品として保管されていたなかにこれと同様のものが10数点混じっていた。灰を主体に焼土や貝殻片が混じるように見える塊状の物質である。うち４点には平滑で灰色を帯びた平坦面がある。床面に貼られていた可能性がある。数点について成分の分析を実施する予定である。

古くから注意されていた。千葉市草刈場貝塚，市川市曽谷貝塚・堀之内貝塚の「床面に環状に灰を敷いた「環状灰床」」、千葉市多部田貝塚の「床面と思われる表面に主として焼いたキサゴの破砕片を敷きつめた

平地住居」などである。

糞石　１点保管されている。本来は動植物遺体だが，土器以外のその他で報告する予定。貝サンプルの選別で抽出される可能性がある。

第４章　動植物と埋葬

章立ては検討を要する。年末をめどに分析成果を受け取り、各項目を取りまとめていきたい。ここでは現状と記載予定内容を記す。

（１）動植物遺体の概要と分析方法

現地採取料／サンプル抽出資料があること、サンプルの水洗・抽出方法など、動植物全体にかかる部分を記載する。

第２節　植物

後述の炭化植物遺体の分析のほか、佐々木由香氏と早稲田大学考古学研究室（大網信良助手ら）による土器付着圧痕の分析でも植物種子圧痕をいくつも検出している。これらの成果に加えて、写真や記載のみのもの（土坑から多量の炭化クルミ出土等）、過去の分析の成果などを記載して、植物質食材の利用について予備的な検討を行う。千葉県は分析・検討が遅れている。集落周辺の低湿地に縄文時代の層が良好に保存されており、今後の調査・分析の成果が期待される。

第３節　貝類

多量の貝サンプルが保管されていたため、水洗・選別、同定・集計と計測を行った。都川・村田川水系は比較的データが揃っており、西野発表のように集落感の比較が行われているが、千葉市にはさらに同時期の未分析資料が数多く残されており、比較資料としていきたい。未解決の「破砕イボキサゴ」の実態を検討するための材料として、観察・計測の結果を提示する。なお、分析を外部に委託しないため第５章に入れなかったが、同様に委託しない黒曜石は入っている。章立ては再度検討したい。現状ではここに分析の成果と貝類のまとめを記載する。

第４節　魚類・第５節　鳥獣類

動物遺体全体に関わる部分と、分析成果のまとめを記載する。都川・村田川水系は比較的データが揃っており、データを追加して樋泉・西野が実施してきた集落間の動物資源利用の比較分析をさらに進めたい。

第６節　埋葬と人骨

出土人骨の概要、出土・保管の経緯と現状、これまでに分析された成果などをとりまとめて、当遺跡の人骨資料のすばらしさを伝えたい。全体の分布、個別の埋葬骨の図・出土状況を提示したい。記録類の整理が途中でストップしており、体裁等はこれから検討する。東大資料番号との擦り合わせが課題となる。今後整理を再開して図表を用意して、取りまとめを堀越館長と相談する。

装身具の共伴は南貝塚のイノシシ牙玉１点がある。成人男性の左足の膝頭に密着した状態とされる。

第５章　分析

委託項目と状況を示し、成果は次回報告したい。

（１）石器の産地鑑定・分析

考古石材研究所、柴田徹氏に委託（25・26 年度）

一部未了の部分と取りまとめについて今年度調査指導を予定している。

（２）黒曜石の産地推定

過去の分析成果をとりまとめる。新たな分析は実施しない。

（３）炭化植物遺体

土器付着炭化物、現地採取と貝・土サンプル検出の炭化大型植物遺体の分析鑑定を委託。比較的多くの遺体を検出している。古環境、植物の利用の取りまとめと、今後の検討課題についても相談する。

（４）動物遺体

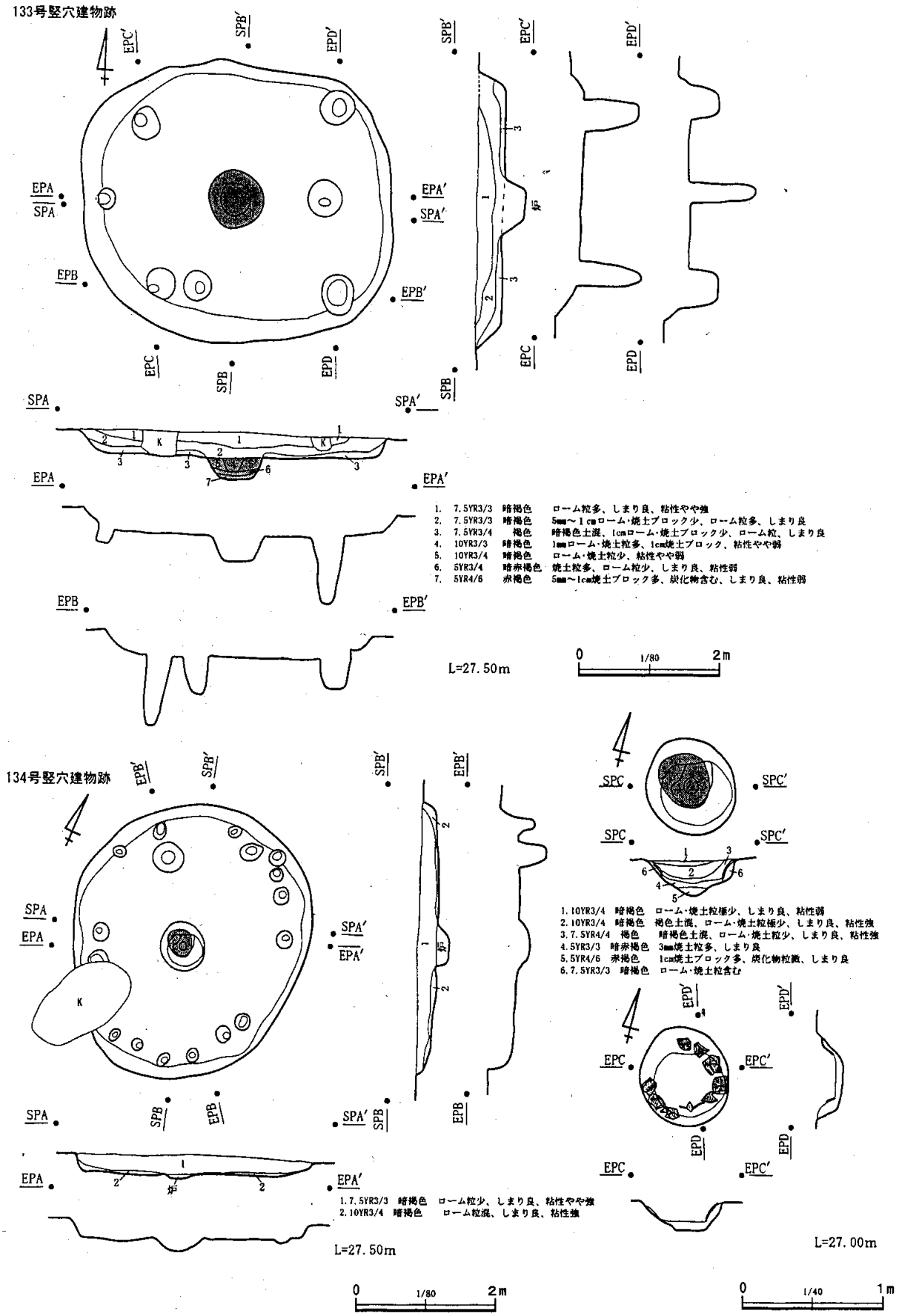
村田六郎氏が一部分析済み。樋泉岳二氏、服部智至氏に引き継ぐ。

（５）人骨

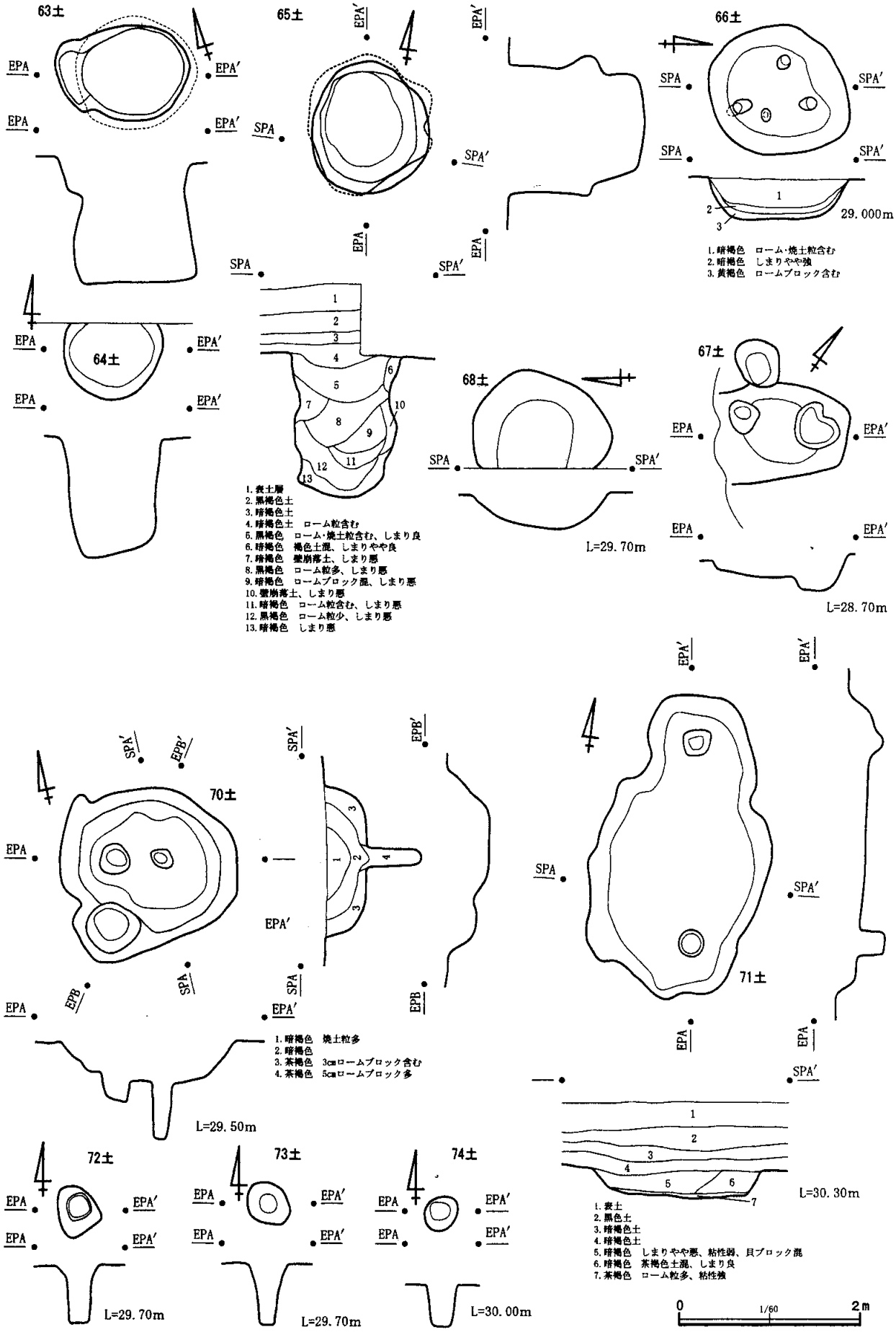
ほとんどは東大人類学博物館保管資料となっており、加曽利博紀要等に資料リストや形質的な情報が掲載されている。獣骨等から新たに見つかった 1960 年代の調査に由来する人骨の追加を依頼した（諏訪元氏・大久保大輔氏）。そのほか、1958 年出土明治大学所蔵人骨、新潟大学保管資料についても簡単な記載がなされている。

（６）動物骨の食性分析

シカ・イノシシの同位体分析を東京大学米田穣氏に委託した（24・25 年度・市の別途事業として実施）。歯エナメル質の炭素・酸素・ストロンチウムの同位体比分析によって、イノシシのほうがシカよりも多様な地質環境から遺跡に持ち込まれた可能性が示唆された。興味深いデータが得られたため、分析を追加する予定。試料抽出のための準備を終えたところである。



第図　東傾斜面史跡整備第3調査区D15.16実測図



第●図　東傾斜面第5次調査区　63～68、70～74号土坑平面図

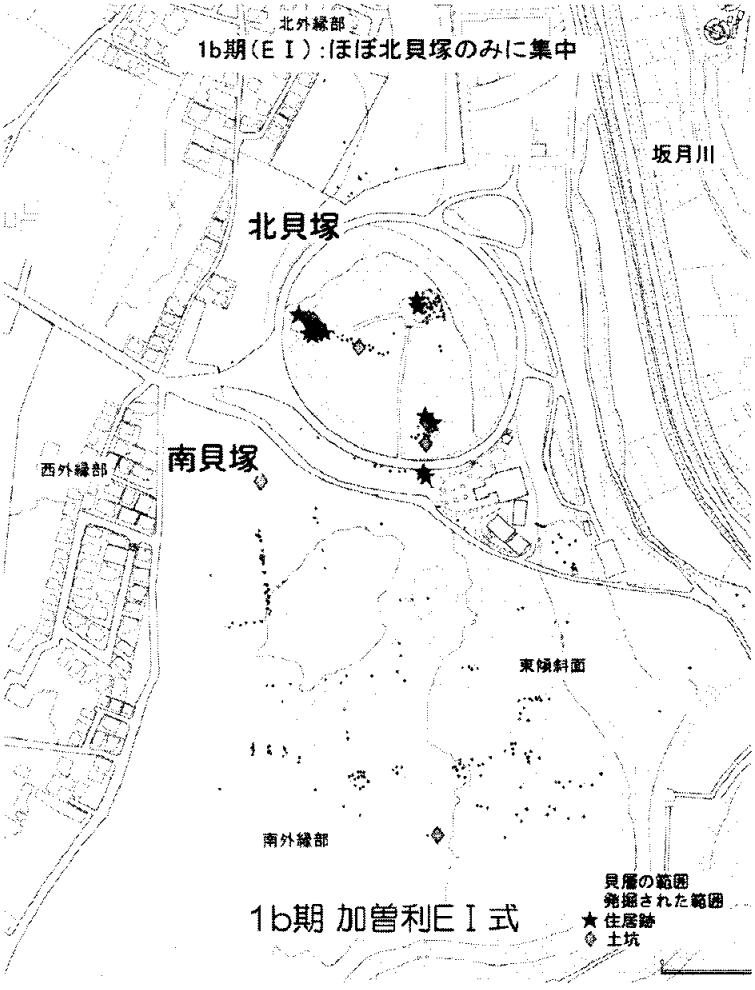
1期(中期中葉)

北貝塚貝層形成。遺構群環状をなし、周囲に分散的な居住域をもつ

1a期(阿玉台・勝坂後半):住居跡・貯蔵穴出現
北貝塚縁辺部に集中のほか広域に分散

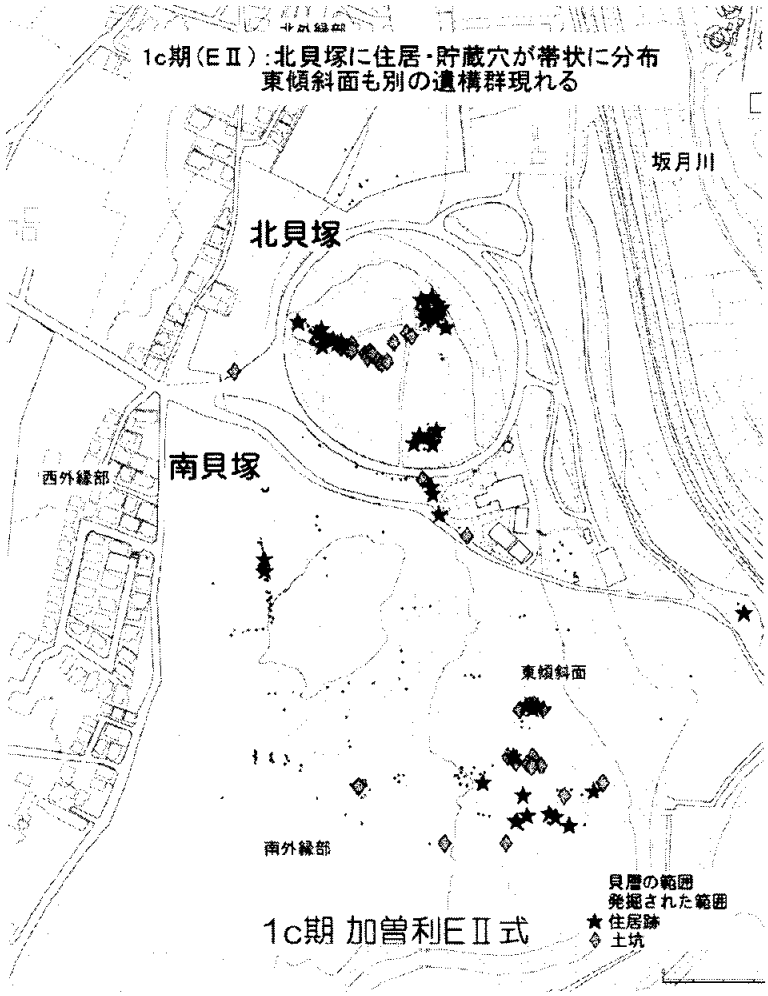
1a期 阿玉台式・勝坂式

1b期(E Ⅰ):ほぼ北貝塚のみに集中



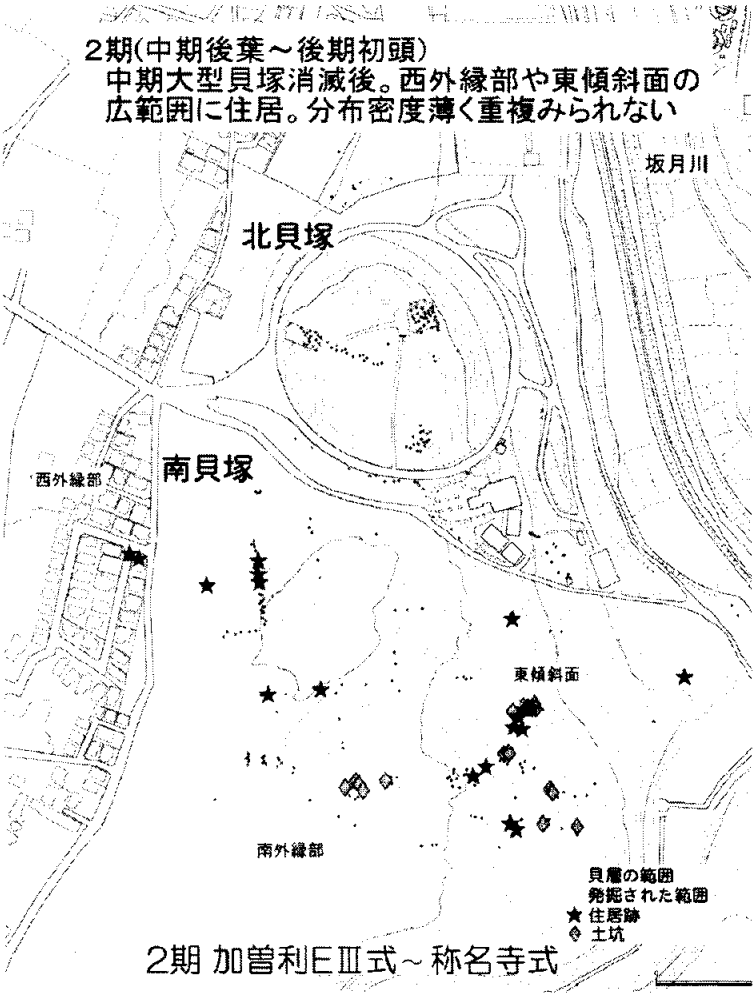
1b期 加曽利E Ⅰ式

1c期(E Ⅱ):北貝塚に住居・貯蔵穴が帯状に分布
東傾斜面も別の遺構群現れる

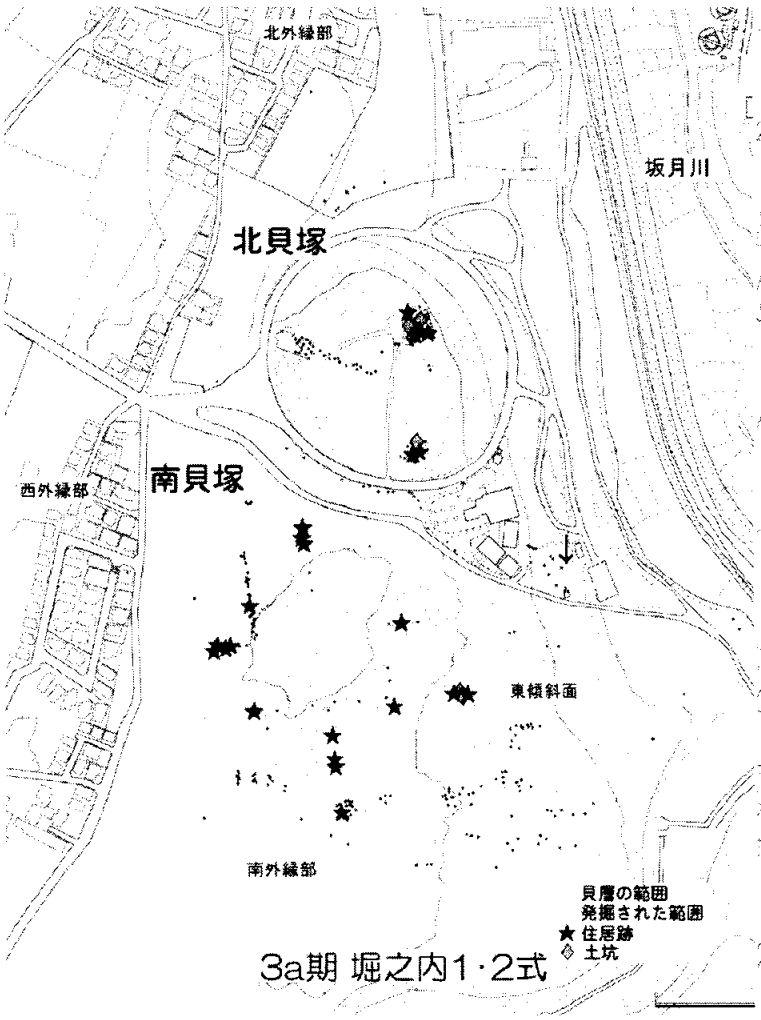


1c期 加曽利E Ⅱ式

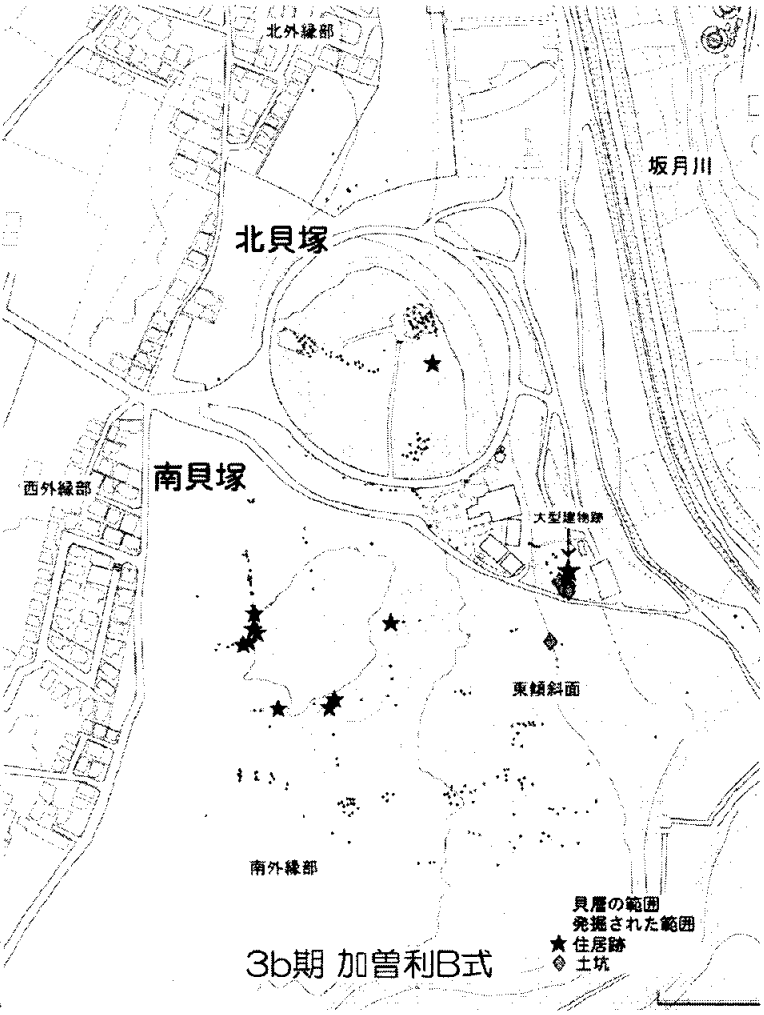
2期(中期後葉～後期初頭)
中期大型貝塚消滅後。西外縁部や東傾斜面の広範囲に住居。分布密度薄く重複みられない



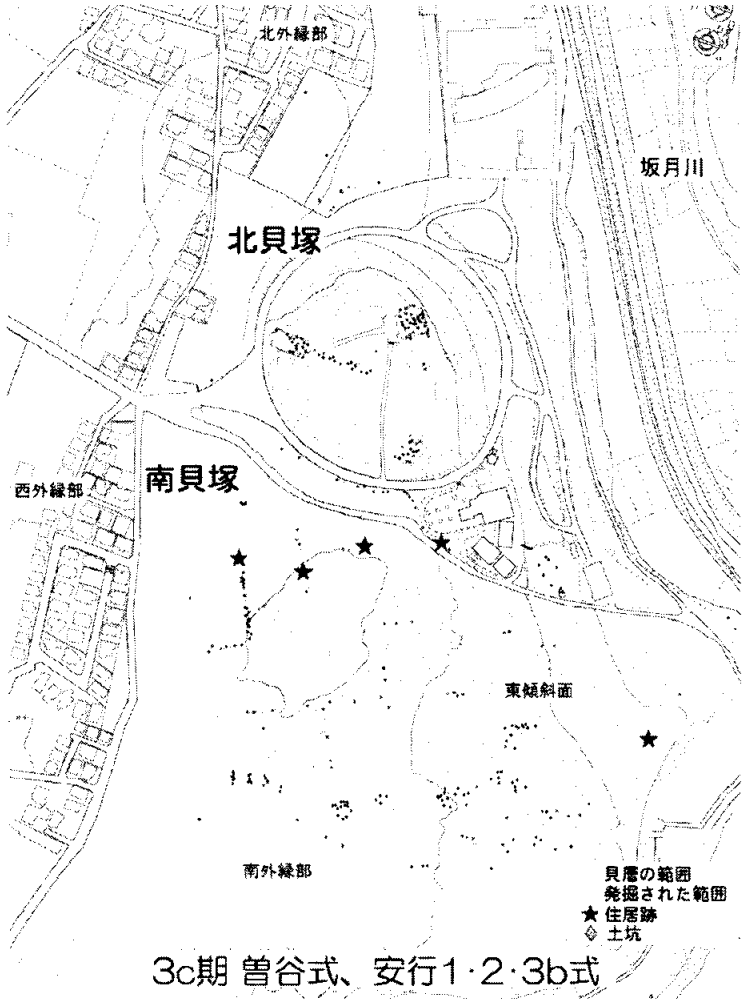
2期 加曽利E Ⅲ式～称名寺式



3a期 堀之内1·2式



3b期 加曽利B式



3c期 曽谷式、安行1·2·3b式

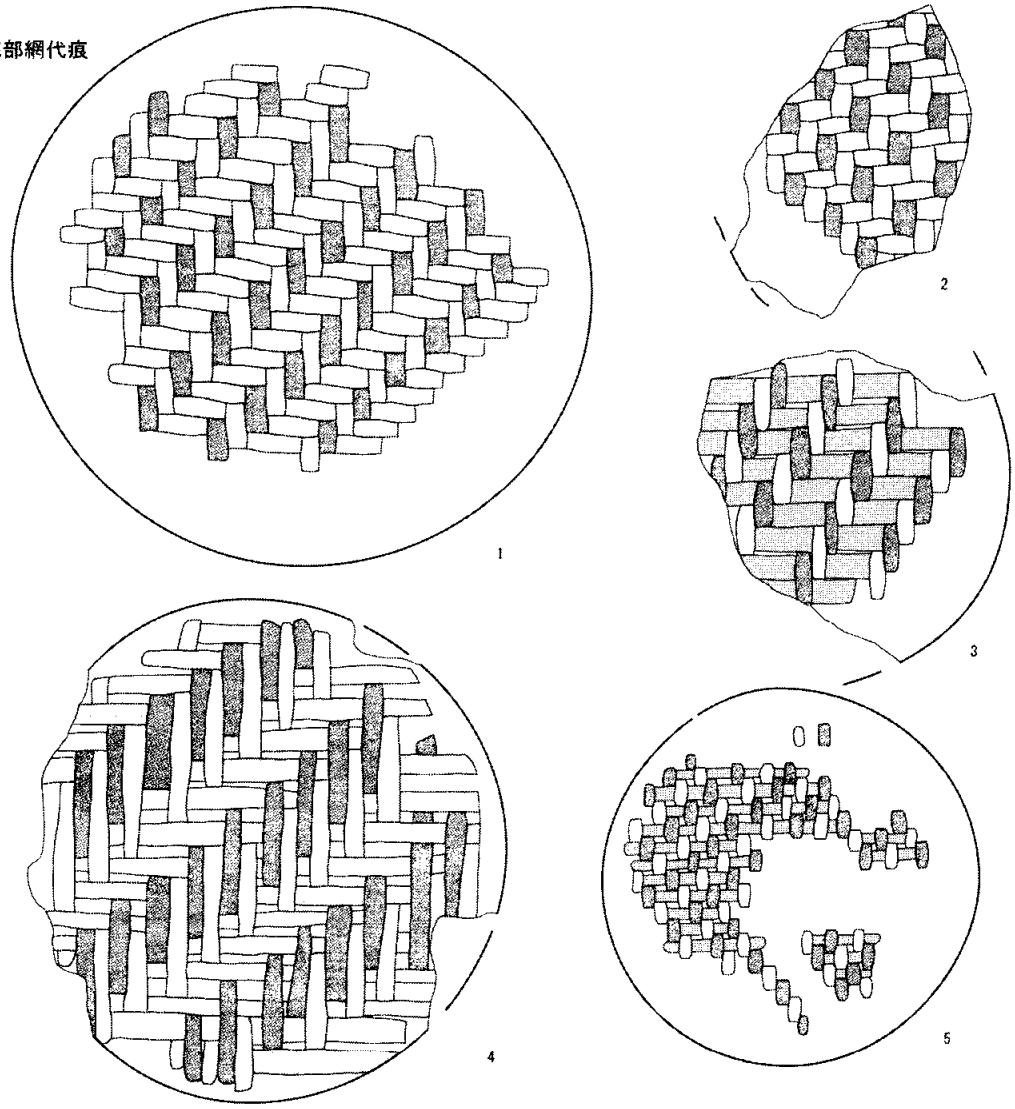
3期(後期前葉～晩期前半)
南貝塚の貝層と遺構群が形成される

3a期(堀之内):南貝塚の貝層範囲付近に集中
北貝塚にも少し遺構が復活

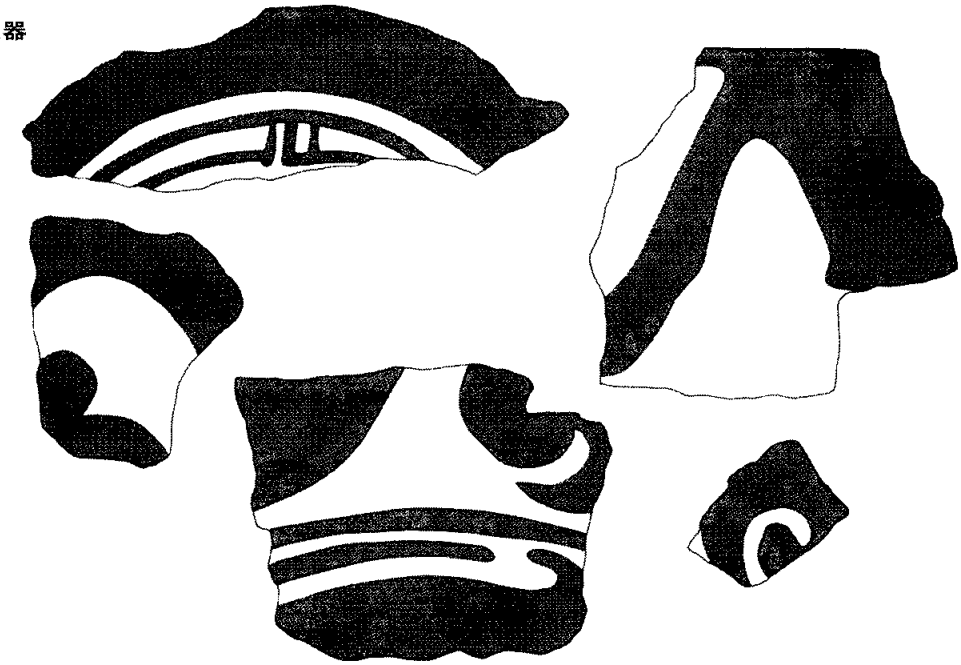
3b期(加曽利B):南貝塚の貝層の内寄りに集中
遺構見えなくなり貝層中に焚火・平坦面多
東傾斜面に大型建物跡・土坑

3c期(安行):貝層の形成少、前半でほぼストップ
貝層内側の窪地に土器が集中

土器底部網代痕

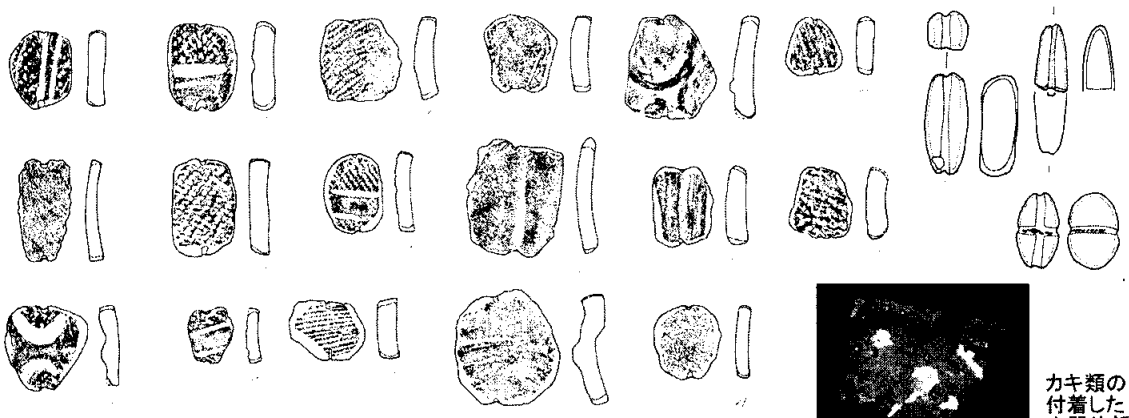


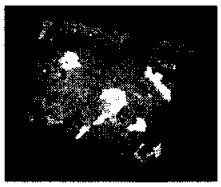
赤彩土器



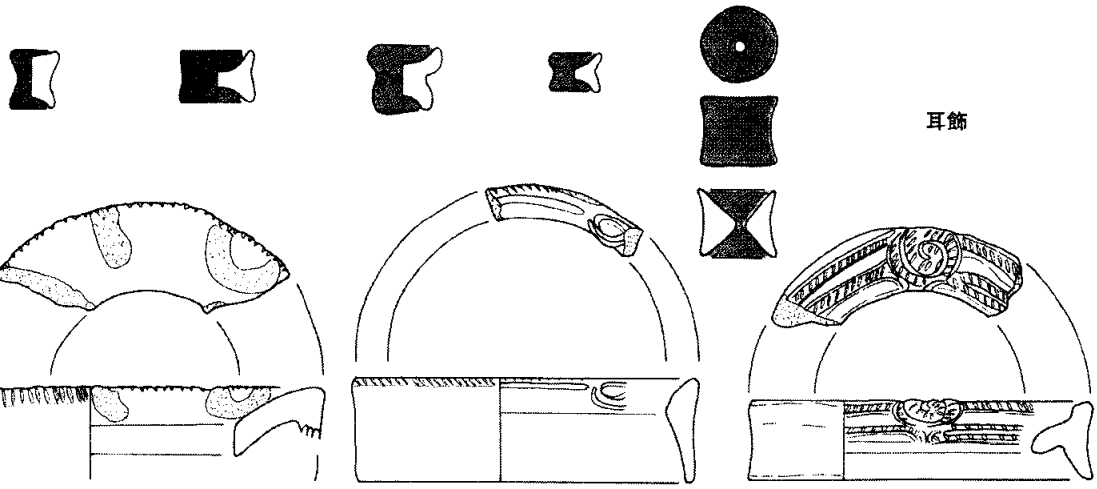
土器片錘

有溝土錘

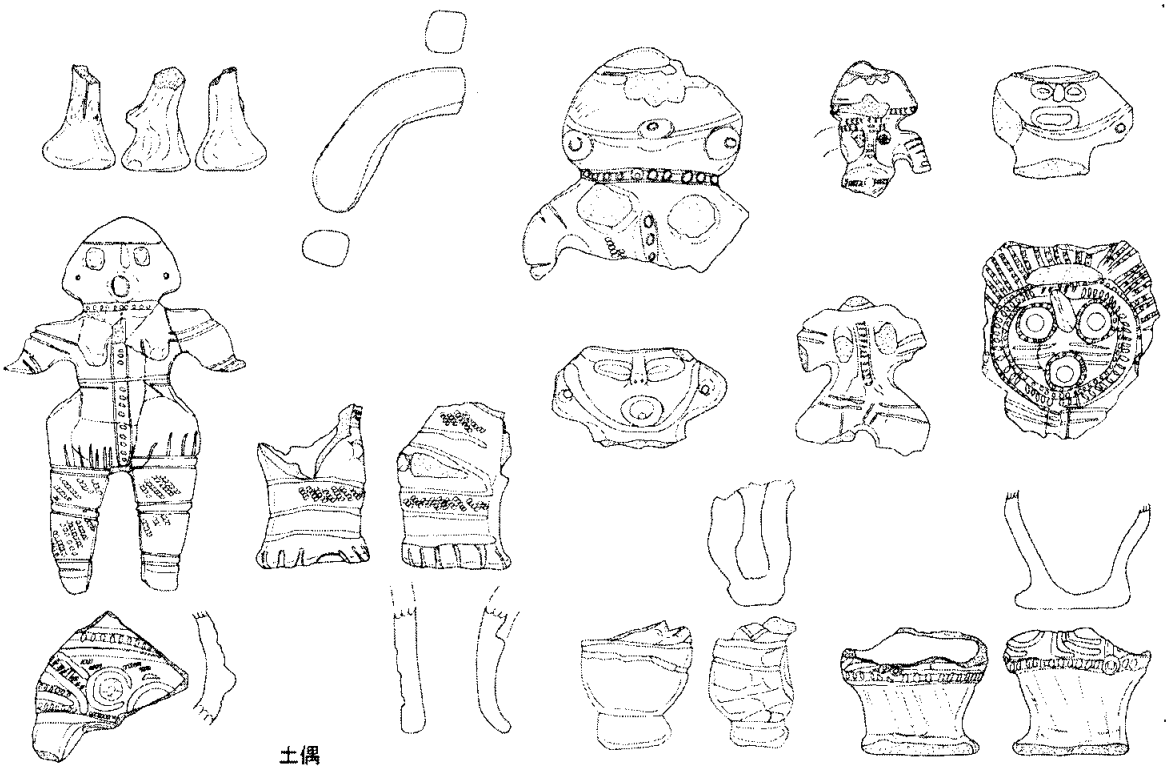




カキ類の付着した土器片錘



耳飾

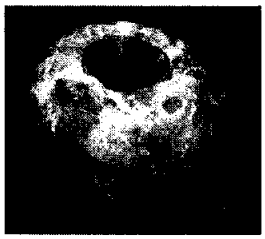


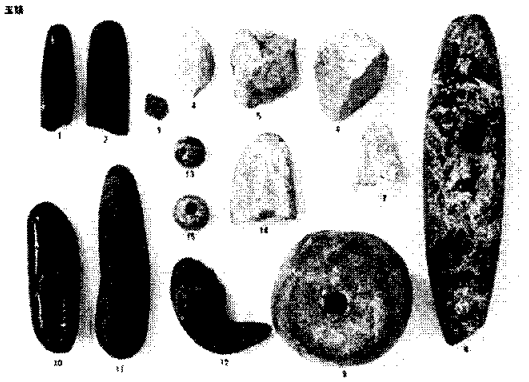
土偶

土版

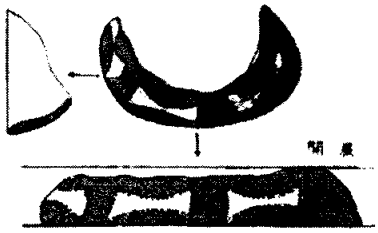
ミニチュア土器
その他の土製品

ヒスイ丸玉

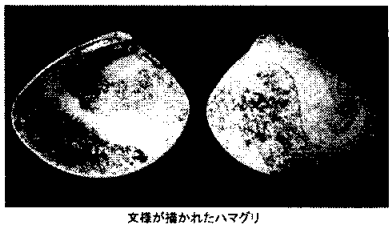




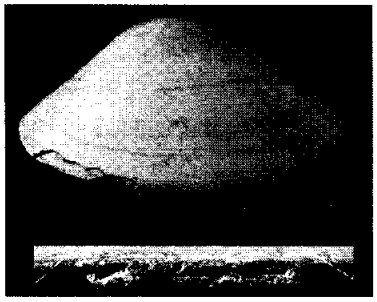
玉類



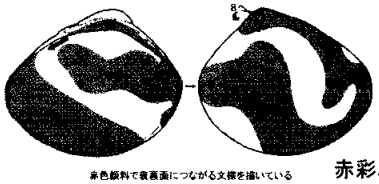
京都大学所蔵貝製品
（樋口清之1952に彩色）



文様が描かれたハマグリ



貝刃
縦方向の線状痕と
磨滅みられる



赤色顔料で表裏面につながる文様を描いている

赤彩ハマグリ